

オランダの原活版印刷本について

檜 枝 陽 一 郎

0. 問題の所在

ゲーテンベルクによる有名なラテン語による『四十二行聖書』が1450年代の前半に完成してから、活字を組んで印刷するという活版印刷術はひろくヨーロッパに浸透していった。ただ、最初の15年間の普及の速度は、どちらかといえば遅々としたものであった。技術を習得したのちに起業するにはある程度の時間が必要であり、そのせいで最初の15年間における普及の速度は遅かったようである。オランダおよびベルギーの諸都市に関しては、最初に印刷業がはじめられたのは、1473年のアールスト¹⁾ およびユトレヒト、1474年のルーヴェン、1475年のブリュージュ、1476年のゴードおよびブリュッセルなどの都市においてであった²⁾。現在のオランダに限って言うならば、刊行されたインキュナブラ（揺籃本）の総数は1250点を数え、そのうち73%がラテン語によるもの、27%が土着のオランダ語あるいは少数のフランス語によるものであった。その内容は全体として48%が古典文献および文法書、人文主義者の著作で、40,1%を聖書や典礼書などの宗教関係が占めていた。3,1%を哲学が占め、民法や地域の法典、貨幣鑄造法やその他の勅令に関するもの、ならびに政治、歴史、地理といった科学文献が3,3%、自然科学や農学、天文学、数学、医学関連が1,0%、世俗のフィクションや土着語による詩が4,5%であった³⁾。印刷術が発明されてから1500年までの短い期間に、これだけ膨大な量の印刷書籍が出版されたことは驚くべきことである。

こうして見ると、オランダでは写本の時代から一挙に印刷書籍の時代へと移行したように思うかも知れない。しかし実際はそうではない。最初に印刷本が出版された1473年以前に遡ると考えられる印刷書籍も存在しており、それらにはしかし刊行年および刊行地、刊行した印刷業者の名前が記載されていない。また1473年以前にオランダで製作されたと思われる、やはり書誌情報のない木版本（英語 xylography）がすでに流通していた。

他方インキュナブラの研究史においては、かつて印刷術の発明者をめぐる論争が数世紀にもわたって続いていた。印刷術を最初に発明したのは誰か、マインツのゲーテンベルクか、それともオランダのハーレムに住んでいたラウレンス・ヤンスゾーン・コスター Laurens Janszoon Coster なのかをめぐって激論が闘わされた。とくに19世紀後半から20世紀初頭に掛けて、ゲーテンベルク説を採用する者とコスター説を採る者との間で激しい議論の応酬があり、その際、前述した刊行地および刊行年、刊行した印刷業者の名前が記載されていない印刷物が論争に絶好の材料を提供した。書誌情報が何もないので、コスターの支持者は外観がプリミティブな印刷書籍あるいはその断片に、できるだけ早い成立年を当てようとした。ゲーテンベルクが活版印刷術によって『四十二行聖書』を出版したのが1450年代前半であるので、コスターの支持者は前述した印刷書籍が1450年以前に成立したことを裏づける証拠を探したのである。手掛かりとしたのは次の三点であった。第一に1499年に出版された『ケルン年代記』にある記述で、「この技はマインツ市において発明せられ、現行の方法もて印刷せられしは疑いをいれざるところなるも、そのはじめの着想 (vurbyldung) はオランダ

より得しものにして、すでに同国においては『ドナトウス』のごときものをこの方法もて印刷に付せり。」とある⁴⁾。第二は、1588年に出版されたハドリアヌス・ユニウス *Hadrianus Junius* の手になる『バタヴィア』にある記述で、コスターが木片に字を彫り、紙の上に捺印することからヒントを得て、木活字による印刷法を案出し、そして雇い入れたヨハン・ファウストとかいう者が、クリスマスイブの日に仕事場から業務に必要な道具いっさいを盗み出し、まずアムステルダムにのがれ、さらにケルンを経てマインツに赴き、盗んだ器具・材料をもとに印刷工場を開いたという話である⁵⁾。第三に、コスターが印刷したと思われる印刷本がプリミティブな外観をしており、それが早い成立年代を窺わせるという点である⁶⁾。結論を先に言えば、コスター説が誤りであることが、本論の中で明らかになるであろう。ただ、以上の三点に関してここで少し解説しておくのも有益だと思われる。第一の『ケルン年代記』にある「はじめの着想 (*urbyldung*)」というのは木版印刷のことを指しており、現実にはそうではないものの、当時の人々は木版画を活版印刷に先行するものだと見なしていたという説があるのを指摘しておきたい⁷⁾。第二の『バタヴィア』にある記述は、数少ない事実もなかに点在しているとはいえ⁸⁾、単なる虚構による神話である。それは多くの研究者がこれまで数世紀にわたって惑わされ続けてきた神話に他ならない。ヨハン・ファウストなる人物が、ヨハネス・グーテンベルクあるいはその協力者であったヨハネス・フストを暗示し、後者の姓のファウストもフストとの連繫を図った名前であるとわかる。ユニウスはそうして、自分の言説の信憑性を高めるとともに、グーテンベルクやフストが盗人であるとの印象を植えつけようとした⁹⁾。第三に、印刷本のプリミティブな外観については、何をもってプリミティブあるいは原始的とするのかに注意する必要がある。そうした外観をもった印刷本は、しばしばコスター説の支持者から成立年代を早くするための材料として利用されてきた。しかしプリミティブな外観が必ずしも早い成立年代を意味しない。

いずれにしても問題の核心にあるのは、書誌情報が無く、それゆえこれまで時代的にも地理的にも明確に位置づけられなかった活版印刷術による書物である。これらはかつて、コスターの名に因んでコステリアーナ *Costeriana* と称されていた。しかし現在では原活版印刷本 (英語 *prototypography*) といい、写本と明確な書誌情報のある書籍との中間にあるものとして論じられることが多い。低地諸州において最も早い時期の活版印刷による書籍であると想定されるものの、1473年以降に印刷され出版されたものもある¹⁰⁾。本論の目的は、まずオランダにおける原活版印刷本の内容と分類の可能性を明らかにし、さらに当時の出版文化の中心とその構造を考察することにある。

1. 原活版印刷本の分類

これまでに発表された原活版印刷本に関する研究は、様々な基準を使いながらそれらを分類している。その基準は以下の3つに大別できるだろう。

(1) フォントタイプによる分類。原活版印刷で用いられたフォントは HPT によると大別して8種類あり¹¹⁾、それぞれの印刷本がどのフォントで印刷されたかによって分類する。フォントの表記には、フォントの大きさ (第1行の並び線から第21行の並び線までの20行の長さのミリメートル単位での表記) と、それに書体を表すアルファベットを大文字で表記する¹²⁾。たとえば 123G とあるなら、20行の長さが 123mm で、書体はゴシック体であることを示す。また、タイプ 1、2、3 のように数字によって

各タイプを表記する場合もあれば、サリチェトタイプというように、フォントが使用された印刷本のうちでその代表的な作者をフォントの名称として使う場合もある。以上3つの表記法を過不足なく表記する目的で、本論ではたとえば次のように表記する。

タイプ5 (サリチェトタイプ) = 123 G

ただし印刷本によっては2種類のフォントが同じ作品の中で使用されているにもかかわらず、一人の作者がタイプの名称となっている場合があり、注意を要する。後述するように、イタリアの法学者であったポンタヌスの法律書の前半はタイプ4=142Gが使用されている一方、後半ではタイプ5 (サリチェトタイプ) = 123 G も使われている。したがってタイプの表記はポンタヌスタイプであるものの、実際の合本では別のタイプのサリチェトタイプも用いられているので注意する必要がある。

(2)原活版印刷本をその内容によって分類する方法。原活版印刷本はその内容から3つのグループに分類するのが普通である。①『人間救済の鑑』の各四版、すなわち2つのラテン語版と2つのオランダ語版、②明白に人文主義的特徴をもった一連の出版物、③アレクサンダー・デ・ヴィラ・デイのラテン語教材、アエリウス・ドナトゥスによるラテン語文法書、いわゆる『カトーの対句集』といったラテン語教材、また祭式用のテキストの断篇三種など¹³⁾。

(3)印刷物の残り方によって、それが断片なのか、完本なのか、あるいは合本なのかを区別する必要がある。『人間救済の鑑』の各四版はほぼ完本の形で残っているのに対して、ドナトゥスなどのラテン語教材は、使用された後に裁断されて他の印刷本の見返しや表紙の詰め物として使用されたせいで、大半が断片として残っているだけである。また、サリチェトやポンタヌスなどの著作は、中世の写本でもそうであるように¹⁴⁾、様々な作品や小論、墓碑銘などを組み合わせて印刷して、全体として合本の形で存在する。その際、一定の傾向に沿って様々な著作から抜粋されている。原活版印刷による合本では、前述のごとく明白に人文主義をテーマにして諸作品が編集されている。

断片の中には、同版中で相異なる部分 (英語 state) が残っている場合や、合本の中には同じ組版のなかの数冊 (copies) が残っていることもある。たとえば、サリチェトの名を冠した合本には、大英博物館が現在所蔵しているものが三冊ある¹⁵⁾。通常、それぞれの本を区別するために、各種のインキュナブラ総覧では番号が付されている。フォントタイプによる分類は以下の通りである¹⁶⁾。

①タイプ1 (スペクルムタイプ1) = 110G

スペクルムタイプというのは、原活版印刷本のなかでかなり特殊である宗教書『人間救済の鑑』に用いられたフォントを言う。『人間救済の鑑』はラテン語で *Speculum humanae salvationis* というので、スペクルムという名前が付された。『人間救済の鑑』には四版があり、遺存しているのは計40標本で、推定されている成立年代順にその四版を挙げると以下の通りとなる。

(1)ラテン語版 (純正版)¹⁷⁾ CA1570¹⁸⁾

『人間救済の鑑』がかなり特殊なのは、各葉が挿絵とテキストから厳密に構成され、しかも挿絵は木版印刷の製作方法によって、すなわち木版上に紙を置いてから擦って製作している一方で、テキストは活版印刷によっているからである。したがって単純に活版印刷本というよりも、厳密には活版木版併用印刷本 (typoxylographie) といった方が正しく、こう表記されることもある。他方「純正版」というのはテキストに関してのことで、このラテン語版の場合では一種類のフォントタイプ、す

なわちスペクルムタイプ 1=110G しか用いられていないことを指す。さらに、挿絵には褐色の水溶性インキが用いられ、他方テキストには黒色の油性インキが使用されている。水性インキは紙に浸透するので裏面の印刷が不可能となり、テキストとともに片面だけの印刷となった¹⁹⁾。挿絵を説明するためのタイトルがラテン語で挿絵の下部にある。挿絵は総計 58 あり、各葉にあるそれぞれの挿絵は、一本の柱によって左右二つの部分に分かれる。二折判。13 標本が残るといふ²⁰⁾。

(2)オランダ語版（混成版）CA1571

ラテン語ではなくオランダ語散文に訳された版で、「混成版」というのは、テキストの一部、すなわち 2 葉分（49 左および 60 右、ただし一枚の全紙）がより小さな活字（スペクルムタイプ 2=103G）で印刷され、両タイプが混在している状況から付されたものである。二折半で大きさは 273mm×204mm だといふ²¹⁾。いずれにしても、『人間救済の鑑』を印刷した印刷業者が、タイプ 1 とタイプ 2 のフォントを所有していたことの証拠であり、両活字は一連のものとして扱う必要がある。標本数 7。

(3)ラテン語版（混成版）CA1569

テキストにタイプ 1=110G を使用している点是不変なもの、そのうち 20 葉が木版印刷によって製作されていることから「混成版」と言われる。その部分は前記した(1)のラテン語版をそのままトレースして木版に彫ったものの上に紙を置き、擦って印刷している。二折判で 64 葉から成る。標本数 15。

(4)オランダ語版（純正版）CA1572

この版に使用された活字タイプもタイプ 1=110G であるものの、実際に計測するとややそれより小さい 105/107mm²²⁾。標本によっては 106mm ないし 104mm の大きさしかないといふ²³⁾。実際にこの版を見ると、かなり使い古して擦り切れたような印象を得る。紙が乾燥して収縮したためというより、使い古したのでフォントのボディーが擦り切れて小さくなったようである。かなりプリミティブな印象を受けるので、この版が『人間救済の鑑』の最古の版だと誤解されてきた²⁴⁾。62 葉、5 標本が残る。

『人間救済の鑑』は、すでにハドリアヌス・ユニウスの『バタヴィア』に言挙げされているので、早い時期からゲーテンベルク・コスター論争において議論の対象となった。また、ラテン語版二種とオランダ語版二種の時系列的な順序もかなり早い時期から研究されてきた²⁵⁾。しかし、その年代特定がほぼできるようになったのは、A・スティーブンソン Stevenson による紙の透かしの研究以降であり²⁶⁾、この推定は現在研究者の間で受け入れられている。それに従えば、各四版の成立年代はおおよそ以下の通りである。

(1)ラテン語版（純正版）	1468 年
(2)オランダ語版（混成版）	1471 年
(3)ラテン語版（混成版）	1474 年
(4)オランダ語版（純正版）	1479 年

ゲーテンベルク・コスター論争は、両者のうちのどちらが先に印刷術を発明したのかという先陣争いに他ならなかった。ゲーテンベルクが『四十二行聖書』を印刷したのは 1450 年以降とされるので、もしコスターが印刷術を最初に開始したのだとするなら、当然 1450 年より以前に印刷を開始してい

なければならない。スティーブンソンによる年代特定が正しいとすると、ハドリアヌス・ユニウスの『バタヴィア』にコスターの名前とともに書名のあがった『人間救済の鑑』は、ゲーテンベルクよりも後代に成立したことになり、先陣争いはゲーテンベルクに分があると見なさねばならない。

『人間救済の鑑』はその内容からして、聖書の予型論的な解釈を中核とする民衆教化あるいは司祭教育のための書物である。予型論的な解釈とは、旧約聖書における人物あるいは事物、事件が新約聖書のなかにその対応物をもつという考えで、旧約聖書および新約聖書の内的関連性に着目した解釈法である。逆に新約聖書における人物あるいは事物、事件は旧約聖書にその前兆があるとも言えよう。すでに聖書でも、大洪水の水は洗礼の前兆だとされ（「ペトロの第一の手紙 3:21」）、アダムは来るべきお方の前兆であったなどと表現されている（「ローマ人への手紙 5:14」）。その際、旧約聖書の人物あるいは事物、事件は原型（英語 prototype）と呼ばれるのに対して、新約聖書の対応物は対型（antitype）と称される²⁷⁾。たとえば『人間救済の鑑』の第16章でも、最後の晩餐がマンナ（「出エジプト記」16章）および過ぎ越しの生け贄としての子羊（「出エジプト記」12:1-11）、メルキセデクがアブラムにパンとぶどう酒を供えたことと対比され（「創世記」14章）、最後にメルキセデク自身も司祭階級の重要性を前もって示すものとされた²⁸⁾。

ほかにタイプ1（スペクルムタイプ1）を使用して印刷された本として、アレキサンダー・デ・ヴィラ・デイ（あるいはアレキサンダー・ガルス）のラテン語教材『ドクトリナーレ』の版が一つあり²⁹⁾、さらにいわゆる『カトーの対句集』³⁰⁾、ドナトゥスによるラテン語文法書、また教会での礼拝に使用された典礼式文としての痛悔詩篇がある³¹⁾。

②タイプ2（スペクルムタイプ2） = 103G

前述のように『人間救済の鑑』のオランダ語版（混成版）の2葉だけにタイプ1より小さなタイプ2が用いられた。さらにタイプ2には、タイプ2からタイプ3への過渡期を表している、タイプ2の特徴とタイプ3の特徴を併せ持つタイプとしてタイプ2* およびタイプ2**がある³²⁾。重要なのは、この二つのタイプによって、タイプ2（スペクルムタイプ2）とタイプ3（ヴァラタイプ）が相互に関連するのが判明したことである。

タイプ2* = 98 (103?) G

1962年にアントヴェルペンのルースブルーク協会の図書館で発見されたドナトゥス断片で、羊皮紙に印刷された一葉が残る。羊皮紙がきわめて乾燥した状態で、20行の大きさが98mmと計測されたものの、タイプ2と同じ103mmである可能性もあるという³³⁾。このタイプは、『人間救済の鑑』の2葉に使われたタイプ2に近似すると同時に、タイプ3の特徴も併せ持つものである³⁴⁾。

タイプ2** = 111 (113?) G

タイプ2**で印刷された四折判のドナトゥス断片がハーレム市立図書館に所蔵されている。印刷された羊皮紙の状態からして、タイプ3と同じ大きさの113Gの可能性も捨てきれないという³⁵⁾。このタイプでは小文字はよりタイプ2の特徴を反映する一方、大文字は実際にはタイプ3のものに等しいという³⁶⁾。

③タイプ3（ヴァラタイプ） = 113G

ラウレンティウス・ヴァラあるいはヴァレンシス (Laurentius Valla, Vallensis、現代のイタリア語ではロレンツォ・ヴァッラ Lorenzo Valla) のラテン語訳による『イソップ物語 Facetiae morales alias Aesopus graecus』に使用された活字タイプであるのでこの名がある。四折判、24 葉、合本で以下の小論を含む (CA30)。

- フランチェスコ・ペトラルカ の De salibus virorum illustrium [名士たちの機知について]
- ポッギウス・フローレンティヌス (Poggius Florentinus、別名ポッジョ・ブラッチョリーニ Poggio Bracciolini) の Facetiae[痴話]の抜粋³⁷⁾

ラウレンティウス・ヴァラ (1407 年～1457 年) およびポッギウス・フローレンティヌス (1380 年～1459 年) はペトラルカ (1304 年～1374 年) と並んでイタリアの人文主義者である。ヴァラタイプの特徴は、上記のヴァラによる『イソップ物語』にしかそれが使用されていないことで、現在までこのタイプを使用したドナトゥスなどのラテン語教材は発見されていない。また原活版印刷本のうちで、本の内容がイタリアの人文主義者の著作を主要なものとしている点も特徴的である。前述した『人間救済の鑑』および学校の教材といったその他の印刷物とはまったく内容的に相関しないものだとされる³⁸⁾。

フォントタイプに関して言えば、タイプ 3 (ヴァラタイプ) はスペクルムタイプ 2=103G に酷似しているとしばしば指摘され、タイプ 2* およびタイプ 2** の存在が明らかになったいま、タイプ 2 およびタイプ 3 はともに同一の活字鑄造工の仕事であるのが明らかになったという³⁹⁾。

④タイプ 4 (ポンタヌスタイプ) = 142 G

15 世紀初頭のイタリアの法学者であったルドヴィクス・ポンタヌス・デ・ローマ (Ludovicus Pontanus de Roma、イタリア語読みではルドヴィコ・ポンターノ Ludovico Pontano) による『法律書 Singularia in causis criminalibus』に因んで、タイプ 4 はポンタヌスタイプと称される。二折判、60 葉、活版印刷による合本であり、次の小論が付加されている (CA1186)。

- ピウス 2 世の悪女論 De mulieribus pravis et earum pernicioso damnatoque fugiendo consortio (サリチェトタイプ= 123 G)
- ピウス 2 世による墓碑 De laude atque epitaphiis virorum illustrium tractatus (サリチェトタイプ= 123 G)

ポンタヌスタイプ= 142 G は、原活版印刷本のなかで最大のフォントであるのが特徴で、しかも注意を要するのは、60 葉のうち最初に掲載されたポンタヌスの法律書の部分 (2 右～45 右) がポンタヌスタイプ= 142G で印刷されているのに対して、それにつづく部分が (45 左～60 右) がサリチェトタイプ= 123G を使用している点である。

その他、ポンタヌスタイプすなわちタイプ 4 が使用された例としては、スイスのバーゼルで 1534 年および 1539 年に刊行された三論文から成る小型本 (8 折判) の表紙の詰め物や見返しに使われていた本の内容リスト (Inventory) の断片がある⁴⁰⁾。その一部には、前述したポンタヌスによる法律書の断片と、これまで出典が判明しない未知の本の内容を示した切れ端がある。断片そのものは四折

判である。

またユトレヒト大学図書館所蔵のポルピュリオス断片もタイプ4の活字で印刷され、二折判である⁴¹⁾。その他に、現在までに判明している限りではラテン語教材のドナトゥスの8断片がタイプ4の活字で印刷されている⁴²⁾。

⑤タイプ5 (サリチェトタイプ) = 123 G

タイプ5は、前述したようにタイプ4のポンタヌスの法律書に添加された種々の作品に使用されたフォントである。その最初のものが13世紀のイタリア人医者であったジレルムス・サリチェトによる「健康論 *De salute corporis*」であるので、サリチェトタイプと称されている⁴³⁾。サリチェトの「健康論」に続いて、以下の諸篇および様々な短い文言が添加されて合本となっている。

- ホアン・デ・トルケマダ「精神健全論 *De salute animae*」
- ピウスⅡ世「恋愛論 *tractatus de amore*」
- いわゆる偽ピンダロスによる『イーリアス』のラテン語抄訳⁴⁴⁾

掲載されている様々な短い文言は、証言あるいは墓碑銘、警句、断片などじつに多岐にわたっている。たとえば、ホメーロスを称賛する証言としてペトラルカのものがあったり、アレキサンダー大王の墓碑銘があったりする⁴⁵⁾。注目すべきなのは、碑銘学が、とくに北イタリアにおける人文主義が抱いた関心の中心にあった分野であり、15世紀後半にはかなり流行したことである⁴⁶⁾。またホアン・デ・トルケマダ (Juan de Torquemada) は、ラテン語名ではヨハネス・デ・トゥレクレマータ (Johannes de Turrecremata) といい、スペイン人の神学者で枢機卿であった (1388年～1468年)⁴⁷⁾。前述したように、ポンタヌスの法律書に合本されたピウス2世の2篇の論文もこのサリチェトタイプで印刷されている。したがって、この印刷本を発行した印刷業者は、同時に2種類のフォントを用いたことになり、タイプ4およびタイプ5が同一の印刷業者に帰属し、不離の関係にあるのがわかる。その他、ドナトゥスやドクトリナーレ、『カトーの対句集 *Disticha Catonis*』といったラテン語教材がタイプ5によって印刷された。

タイプ1～5に関して言えば、相互に近似しているだけでなく、複数のタイプが同じ本の中で同時に使用された例や、タイプ同士を繋ぐ中間的なタイプの存在 (タイプ2* およびタイプ2**) も確認されている。それらの関係をいま一度まとめると以下の通りである。

タイプ1で印刷された『人間救済の鑑』のオランダ語版 (混成版) で、同じ本の中の2葉にタイプ2が用いられた。タイプ2は中継肢となるタイプ2* およびタイプ2** を通じてタイプ3と繋がる。またタイプ3は、大文字のM およびR、Tをタイプ4に供給して、それがポンタヌスの本文に印刷されている。その本文には大文字のHがタイプ5から供給されており、その結果タイプ4は一つの印刷所を通じてタイプ3ともタイプ5とも関連するという⁴⁸⁾。

⑥タイプ6 = 122G

G・ツェドラー Zedler はタイプ6を「ドナトゥス専門印刷業者のタイプ *Type des ausschliesslichen Donatdruckers*」と呼んだ⁴⁹⁾。確かに現在までこのタイプによる三つのドナトゥス断片が発見されているだけである。タイプ6は、ブラッドショーによる分類では後述のタイプ7と同様に、ユトレ

ヒトの『人間救済の鑑』の印刷業者のタイプとしてタイプ1～5と同類に扱われている。しかし、タイプ1～5と形態上の類似性が無く、ドイツのデュッセルドルフで発見されたその断片の一つを論じたP・シュヴェンケ Schwenke は、活字のボディーや一般的な筆致を除けば、タイプ5のサリチェトタイプとは文字が全く異なると語っている⁵⁰⁾。シュヴェンケによれば、成立年代はせいぜい1480年頃で、印刷された場所としてはハーレムが想定されるという⁵¹⁾。

⑦タイプ7=120G

ツェドラーはこのタイプを「エービーシーダリウム印刷業者の大タイプ」と名づけて、以下のタイプ8の「エービーシーダリウム印刷業者の小タイプ」と対比させた⁵²⁾。現存する唯一のものは、北ブラバントのウーデン (Uden) にある聖十字修道会の図書館にあるドナトゥス断片であり、羊皮紙、4葉2全紙から成る⁵³⁾。

⑧タイプ8=100G

ツェドラーによればタイプ8は「エービーシーダリウム印刷業者の小タイプ」という⁵⁴⁾。『エービーシーダリウム (Abcdarium)』(CA1) は子供用のラテン語教材で、その内容はアルファベットおよび主の祈り、アヴェマリア、^{フレド}信経その他のラテン語の祈禱句から構成されている⁵⁵⁾。それを見ると、非常に原始的な印刷のように思え、コスター説を支持する研究者にとって大きな拠り所となったものの、小さな寸法の本を版組みするのは決してプリミティブではないという⁵⁶⁾。ちなみにブラッドショーはこの『エービーシーダリウム』とそこに使用されたフォントタイプをユトレヒトの『人間救済の鑑』の印刷業者のものとはせず、使用された場所が不明の一群に入れている⁵⁷⁾。ほかにこのタイプで印刷されたものにドナトゥス断片 (CA611) がある。

2. 原活版印刷本の刊行地について

原活版印刷術の研究にとってもっとも重要かつ困難な問題は、このように相互に関連するフォントタイプを示しながら、それに相反して非常に内容の異なる書物が、どんな印刷業者の手により、いつどこで印刷されたかを推定することである。それらの問題に答える直接の手掛かりは、一部の書物に所有者の書き込んだ年代があるのを除けば、なにも存在しない。15世紀にはすでに分業体制が印刷業には整備されており、活字鋳造工と印刷業者は別の人間であったらしい。したがってタイプ1～5は一人の活字鋳造工が製作したと想定される一方、印刷業者は理論的には一人か複数かの両方の可能性が考えられる⁵⁸⁾。他方、非常に内容の異なる書物、たとえばドナトゥス文法書が人文主義的な色合いの濃い書物と同じフォントタイプで印刷されているという事実もある。この場合、一人の印刷業者が依頼主の注文に応じて様々な書物を同じフォントで印刷したのかも知れない。刊行地に関しては、一箇所である可能性と複数ある可能性がともに考えられる。あるいはドナトゥス文法書を印刷した遍歴する印刷業者がいたのかもしれない⁵⁹⁾。以上のさまざま可能性について、原活版印刷術の研究史を振り返りながら、どれが最も妥当だと見なしうるのかを論じたい。

19世紀後半は、印刷術の発明者を巡ってグーテンベルク・コスター論争が次第に熱を帯びていった時期であった⁶⁰⁾。それと同時に、オランダ・ベルギーにおけるインキュナブラ研究がその基盤を

整えた時代でもあった。オランダやベルギーを問わず、ヨーロッパ各地に遺存するインキュナブラを探し出して目録化して、インキュナブラ総覧が刊行されたのもこの頃である。当時刊行されたホルトロップやキャンベルのインキュナブラ総覧は現在でも十分通用するもので、これによってオランダ・ベルギーのインキュナブラ研究は格段の進歩を遂げたと言っても過言ではない⁶¹⁾。

ゲーテンベルク・コスター論争との関わりで言えば、J・W・ホルトロップ Holtrop は原活版印刷本をハーレムのコスターとその継承者に帰属させている。ホルトロップによれば、マインツ説の支持者から反論はあるにしても、ハドリアヌス・ユニウスが証言したハーレムのコスター説を覆すまでにはならない、したがってユニウスが『バタヴィア』で言及した『人間救済の鑑』などの作品はハーレムでコスターとその継承者が印刷したものだとして想定した⁶²⁾。

そうした論争から距離を置きながら、オランダに残された原活版印刷本、かつてコステリアーナ (Costeriana) と称された印刷物に用いられたフォントの研究を通じて、それらをハーレムではなくユトレヒト由来だと最初に指摘したのは、ケンブリッジ大学図書館のヘンリー・ブラッドショー Henry Bradshaw であった。1871年のことである⁶³⁾。ブラッドショーによると、『人間救済の鑑』に用いられた木版画の一部が裁断されて、それらが1481年にルーヴァンからユトレヒトに移住してきた印刷業者ヨハン・フェルデナー Johan Veldener に再利用され、その印刷物に何よりも先に出現するという⁶⁴⁾。したがって『人間救済の鑑』は、反対論者に有利な事実が知られるまで、ユトレヒトに置き留め (leave) ざるを得ないとする⁶⁵⁾。ブラッドショーは続けて、前述したタイプ1～5の相互関係とそれ以外の2つのタイプの類似性から、7種の活字は密接に関係しており、すべて『人間救済の鑑』を印刷した一人の印刷業者のフォントだと見なした。

キャンベルもまたブラッドショーと同じく、一連の印刷物の類似性と『人間救済の鑑』に用いられた木版画の一部がユトレヒトの印刷業者フェルデナーに再利用されたという2つの論拠によって、原活版印刷術がはじめて行われた都市はユトレヒトであると、控え目に指摘している。「控え目に」というのは、キャンベルが個々のインキュナブラの記述に際してユトレヒト成立説に言及しているものの、「Utrecht?」のように疑問符つきで語っているからである⁶⁶⁾。キャンベルはその後、A・ファン・デア・リンデ van der Linde がコスター伝説に全般的な転換をもたらし、ハーレム説が重要視されなくなったことを踏まえて、ユトレヒト説をいっそう確信したと思われる。

最近の『人間救済の鑑』に関する研究も、ブラッドショーのユトレヒト説を補強するものである。じつは前述した活版木版併用印刷による『人間救済の鑑』の四版に先立って、『人間救済の鑑』にはオランダ語訳された写本が2つある。一つは韻文、もう一つは散文である。散文版は1949年の時点でハーレムのフランス・ハルス博物館の「コステリアーナ」コレクションの一部となっていた。写本の最後に、ユトレヒト近郊のカルトウジオ会に居住するカイマン・ヤンスゾーン・ファン・ツェーリヒゼー Cayman Jans soen van zerichzee が所有するとの奥付があり、それがユトレヒトで製作されたらしいことがわかる。1464年と日付の記載もある⁶⁷⁾。この写本の本文は、ユトレヒトの文章語で書かれ、前述した1471年に成立したとされる『人間救済の鑑』のオランダ語版 (混成版) と同一である。したがって、R・ロッベ Robbe が想定するように、カルトウジオ会が所有していた『人間救済の鑑』の写本をそのままユトレヒトで印刷したと想定するのが妥当であろう⁶⁸⁾。

またキャンベルはポンタヌスタイプ (142G) に関して、ユトレヒトで製本された巻本の見返しにポンタヌスタイプ (142G) で印刷された一葉の紙が使用されていることを挙げ、それがユトレヒトで印刷された可能性を指摘している⁶⁹⁾。M・J・フーズンク Husung もキャンベルと同様、前述した

スイスのバーゼルで1534年および1539年に刊行された三論文から成る小型本（八折判）の表紙の詰め物や見返しに使われていた本の内容リスト（Inventory）の断片が、ユトレヒトの製本師によるものだとし、この断片がユトレヒトで製作されたと考えた⁷⁰⁾。L・ヘリング Hellinga もフーズンクの推定を受けて、ポンタヌスタイプ（タイプ4）およびサリチェトタイプ（タイプ5）を用いた印刷業者を最初のユトレヒトの印刷業者だと見なし、少なくともタイプ4およびタイプ5がユトレヒト由来であることを認めている⁷¹⁾。

ところで、オランダの原活版印刷術がハーレム由来ではなくユトレヒトに由来すると一貫して主張してきたのは、B・クライトヴァーゲン Kruitwagen であった。クライトヴァーゲンは、ポンタヌスおよびサリチェトの合本の内容を仔細に検討して、その一部がユトレヒトで最初に印刷業を興したN・ケーテラール Ketelaer と Gh・デ・レームプト de Leempt の印刷本に継承されているのを明らかにした。具体的にはサリチェトタイプ（タイプ5）によるホアン・デ・トルケマダの「精神健全論 De salute animae」、ラウレンティウス・ヴァラの墓碑名さらにオウィディウス、ボヘミア王ラディスラウス、教皇エウジェニオ4世、教皇ニコラオ5世の墓碑名、また警句がそのままケーテラールとデ・レームプトの各印刷本に継承されたという⁷²⁾。以上の事情を踏まえると、ポンタヌスタイプ（タイプ4）およびサリチェトタイプ（タイプ5）を用いた印刷業者もやはりユトレヒトに位置づけざるを得ない。

相互に関連するタイプ1～5のうちで、まだその帰属を論じていないのはタイプ3のヴァラタイプのみとなった。タイプ3は前述したように、大文字の一部をタイプ4に供給して、またタイプ4には大文字のHがタイプ5から提供されているので、タイプ3は、タイプ4およびタイプ5に関連すると同時に、形態上はタイプ2に酷似する。

タイプ3による印刷物を検討すると、ヴァラによるラテン語訳の『イソップ物語』を主要テキストとして、それにフランチェスコ・ペトラルカやポッギウス・フローレンティヌスの小論を添加しているのが分かる。人文主義的な傾向という点でポンタヌスおよびサリチェトの合本と同じである。こうした、当時において最新のイタリア人文主義の成果が、印刷技術の揺籃期にあったオランダで早くも導入されたのは注目し得る。これらを理解するには大学レベルの高い教養が求められるだろう。それ以上に、広範な知識を求められるのが、添加するテキストを選ぶ側である。まず編者は、イタリアから低地諸州に到るまでの国際的な書籍市場に精通している必要があり、またテキストの需要と調達可能性、自身の幅広い読書量に基づいた適切なテキストの選択、それらの原本を印刷業者へ提供できるほどの地位に就いている必要があるという⁷³⁾。その意味で、1449年から1455年までユトレヒトの首席司祭であった法学博士ウィレム・デ・ヘーゼ Willem de Heze が人文主義者であり、イタリアの人文主義者ポッギウス・フローレンティヌスと書簡のやり取りをして、必要な書籍の問い合わせをしていたという指摘は重要である⁷⁴⁾。こうした事実を照らすと、タイプ3による印刷物もやはりユトレヒトで印刷されたと思わせるだろう。

クライトヴァーゲンは、人文主義的な書籍がユトレヒトで出版されたのは、ユトレヒト大学創設に向けて図書館の蔵書を整備するためであったと指摘した。その根拠は、1470年に大学の設立委員会が発足しているという事実である⁷⁵⁾。ただ、印刷本とユトレヒト大学創設を関係づけるのには他の研究者は必ずしも賛成していない⁷⁶⁾。しかし、40年にわたってユトレヒト司教の座にあったダヴィド・ファン・ブルゴーニュ（在職期間1456年～1496年）の周囲にいた人文主義者たちが関わっていたというクライトヴァーゲンのもう一つの主張は傾聴に値する。前述した『人間救済の鑑』を印

刷するよう依頼したのがダヴィド・ファン・ブルゴーニュであった可能性も指摘されている⁷⁷⁾。とすれば、タイプ1～5を用いた印刷はユトレヒトで行われ、いずれもダヴィド・ファン・ブルゴーニュとその取り巻きが関係したことになる。その意味で、クライトヴァーゲンも指摘したように、フランス語によるドナトゥス文法書（スペクルムタイプ1、CA615^a（Ⅲ））が存在するのは、フランス語を話していたダヴィド・ファン・ブルゴーニュとその周辺にいる家族のために製作されたからと考えてもよい⁷⁸⁾。

3. なお解決されるべき問題

こうして様々な研究者によって解明が進んできた原活版印刷術の研究にも、不明な点がなお多く残っている。たとえば、前述した人文主義的特徴をもった合本は、多くの需要が見込めるドナトゥス文法書などとはちがひ、非常に限られた読者層しかいなかったと思われる。印刷業者はそんな需要が少ない中で商業ベースで本作りをできるのかどうか、しかもフォントやその鑄造に支払うべき費用を考えると、そうした合本は主として商業ベースで行われた本作りではなかったのではと推定されている⁷⁹⁾。

さらにブラッドショーが想定したように、タイプ1～5は一人の同じ印刷業者に帰属するものなのか、複数の印刷業者のものなのか、明白にはわからない。ドナトゥス文法書の分析から、スペクルムタイプ1は、タイプ4およびタイプ5のドナトゥスよりも新しいとの指摘もある⁸⁰⁾。前者は新しい技法である句点を用いているのに対して、後者はまったく句点を用いておらず、タイプ4および5を用いた印刷業者とは別の印刷業者をタイプ1に想定すべきだという⁸¹⁾。あるいは、同一の印刷業者が別のフォントを使ってドナトゥスを印刷する際、句読法を変えただけなのか。

同じフォントタイプを使用しているからといって、ドナトゥスやアレクサンダー・デ・ヴィラ・デイの『ドクトリナーレ』などのラテン語教材は、人文主義的特徴をもった合本を印刷したのと同じ印刷業者の手によるものなのか。クライトヴァーゲンは、ドナトゥスなどのラテン語教材が、それもスペクルムタイプ1やポンタヌスタイプまたサリチェトタイプのものでドイツのケルンで発見されるという事実から、それらが聖堂参事会学校のあったデヴェンター（Deventer）や共同生活兄弟団のあったスヴォレ（Zwolle）で印刷されてケルンに移送された可能性を指摘している⁸²⁾。ただその場合、どのようにして『人間救済の鑑』やポンタヌスまたサリチェトの合本と同じタイプを使ったラテン語教材が、ユトレヒト以外の土地で印刷されたのかを説明する必要があるだろう。むしろユトレヒトでまず製作されたラテン語教材がデヴェンターないしスヴォレで販売された可能性もあると思われるが、この点は今後の検討が必要である。

さらにタイプ1～5とは異なるタイプ6すなわち「ドナトゥス専門印刷業者のタイプ」、ドナトゥス断片が一つしか発見されていないタイプ7、ブラッドショーがユトレヒトから除外して使用された場所を不明とした『エービーシーダリウム』のタイプ8については詳細が分かっていない。

4. ゴーダのヘラルト・レーウからの視点

ここで注意しておきたいのは、中世動物叙事詩の写本『ライナールト物語』が、1470年頃にユトレヒトにあったカルトゥジオ会の書写学校で書写された後に成立していることである⁸³⁾。『ライナールト物語』の完全な写本としては唯一のもので、その意味で貴重である。現在失われている原本はおおよそ15世紀の第2四半期に成立したと考えられるものの⁸⁴⁾、成立場所はユトレヒトではない。新たに追加された本文の後半に用いられた脚韻の研究から、成立したのは東フランドルであるという⁸⁵⁾。それは、ブルゴーニュ公国批判を中心に据えた本文の内容とも一致する。問題は、東フランドルで成立したはずの写本がなぜユトレヒトで書写されたのかという点である。現在想定されているのは以下の可能性である。ブルゴーニュ公国のフィリップ善良公を父親とする非嫡出児であったダヴィド・ファン・ブルゴーニュが、父親の支援を受けて1455年から1496年までユトレヒト司教に任じられた。ユトレヒトに赴任するにあたって、当時ブルゴーニュ公国の宮廷があったフランドルから多くの人間を引き連れてきた。その際、『ライナールト物語』の写本も人々とともに運ばれたのだという⁸⁶⁾。その結果、『ライナールト物語』では、ホントホルストやエヴァーディンゲン、アルケロースやドロングリンゲンといったオランダにある地名が本文中に新たに採用され、写本がオランダに適合させられている。オランダにおけるダヴィドの宮廷は芸術と学問の中心であったとされるので⁸⁷⁾、カルトゥジオ会の書写学校で原本を書写させて写本作りを行わせた公算は大きい。カルトゥジオ会は本の製作をいわば日々の糧を稼ぐための生業としており、これ自体は驚くにはあたらない。

その後、写本はゴーダの印刷業者ヘラルト・レーウによって1479年に『狐ライナールト物語』として刊行された。1479以前に別の版が印刷されたと推定されているものの、これは現存していない。注目すべきは本文に出現している地名の変化である。前述したオランダの地名は、すべてフランドルにある地名に変更された。ホントホルストやエヴァーディンゲンは、ホウトフルストとエルヴァーディンクに、アルケロースやドロングリンゲンはハルレベーケとドロングンに代えられ、その結果『狐ライナールト物語』にはオランダの地名は全く見られない。この変更によって、レーウがどんな読者層を視野に入れていたのかがわかる。それは直接的にフランドルの住民というよりも、フランドルに縁のある、当時ユトレヒトに居住することになったブルゴーニュ宮廷の人々で、潜在的な読者をそこに想定していた。詳細は別稿に譲るものの、ユトレヒト司教となったダヴィド・ファン・ブルゴーニュとその周辺の人々がユトレヒトおよびその周辺域での印刷業に大きな役割を果たしたことは確実である。

ユトレヒトで印刷業を起業したケーテラルとデ・レームプトの共同出版活動は、こうしたレーウの活動と奇妙な共通点を示している。『ライナールト物語』には、その先駆けとなる一群の写本があり、その一つに13世紀後半にフランドルでラテン語訳されたバルドゥイヌス・ユベニスによる『狐ライナルドゥス Reynardus Vulpes』(CA978)がある。おそらく1272年にフランドルのブリュージュ近郊のテア・ドースト(Ter Doest)の修道士が、中世オランダ語の『狐ライナールト譚』をラテン語訳したものをヤン・ファン・フランデレン(生没年1250年~1291年)に献呈したものだろうという⁸⁸⁾。作者の名前が中世のどの写本目録にも掲載されておらず、当時誰も知らないような、いわば私家版とも言える稀有な作品で、作者自身のものとヤン・ファン・フランデレンに献呈された二つの写本しかなかったらしい⁸⁹⁾。ところがこれほど稀観の作品が1474年になって、忽然としてケー

テラールとデ・レームプトの印刷によってユトレヒトに出現する。当然何者かが写本をユトレヒトに運び、それが印刷用原本になったと考えられるが、その原本は二つの写本のうちの一つであったと想定されている⁹⁰⁾。ユトレヒト司教区はブリュージュにシセル (Syssele) 小教区を所有しており、両者の定期的なやり取りの結果、写本がユトレヒトに入ったのだという⁹¹⁾。ラテン語版のまま出版され、そのうち印刷用原本は散逸してしまい、『狐ライナルドゥス』が知られているのは、この1474年の印刷本を通じてのみである。そう考えると、ゴータでヘラールト・レーウが刊行した『狐ライナルト物語』もユトレヒトのケーテラールとデ・レームプトが刊行した『狐ライナルドゥス』も同様の経緯を経てフランドルからユトレヒトに運ばれて印刷された可能性が高い。いずれの場合もユトレヒト司教区あるいはユトレヒト司教ダヴィド・ファン・ブルゴーニュを中核として出版活動が行われているのが明白である⁹²⁾。

以上の経緯には、さらにこれを裏打ちする続きがある。レーウは1484年夏にアントウェルペンへ移住して、その地でも出版事業を継続した。その後1487年から1490年にかけて、今度は写本『ライナルト物語』を底本として散文揺籃本を刊行したものの、それには現在「ケンブリッジ断片」と言われる七葉の断片しか残っていない。注目すべきは、この揺籃本に新たに散文による教訓や木版画、章の見出しなどが追加され、これが1498年にリユーベックで刊行された低地ドイツ語版の『狐ラインケ』の直接の典拠になったことである⁹³⁾。『狐ラインケ』にも散文による教訓や木版画、章の見出しなどがあり、「ケンブリッジ断片」と同じ体裁をとっている。その第一の序には、「世人がその詩人を読みかつ理解できるように、私こと学校教師にして、やんごとなき有徳の君主ロートリンゲン大公の師父ヒンレク・ファン・アルクメルが、寛仁なるわが君の求めにより件の書をイタリア語やフランス語から探し出し、神を称えうやまうように、また本書の読者にとっての有益な教訓となるよう、ドイツ語に翻訳した。私は本書を四部に分け、各章の正しい意味を理解すべく、各章にこの詩人の簡単な解釈や意見を添えた。」とある⁹⁴⁾。序に言挙げされたヒンレク・ファン・アルクメルは、『狐ラインケ』の編者ではなく、中世オランダ語による「ケンブリッジ断片」の編者であると意見が一致している。

じつはヒンレク・ファン・アルクメルは、ロートリンゲン大公に伺候する以前は、ダヴィド・ファン・ブルゴーニュとかなり緊密な関係にあり、ユトレヒト在住であった⁹⁵⁾。ダヴィド・ファン・ブルゴーニュと州議会との妥協によって、1477年4月28日に公示された布告には、八名の顧問団のメンバーがユトレヒト退去を命じられ、最も年下の一人にヒンレク・ファン・アルクメルの名があるという⁹⁶⁾。しかも彼は、ダヴィド・ファン・ブルゴーニュが設立した控訴院（中世オランダ語 Schive）を所轄する検事総長であった⁹⁷⁾。その後ユトレヒト市政が1481年の復活祭後の月曜日に施行した条令によって八名のうち七名のメンバーに、その中にヒンレク・ファン・アルクメルの名もあったのだが、退去命令の解除を命令した。しかし、それ以降ヒンレクの名はユトレヒトの歴史から消えたという⁹⁸⁾。J・スヘルテマ Scheltema の推測によると、ヒンレク・ファン・アルクメルはダヴィド・ファン・ブルゴーニュの元には戻らず、司教とは不断の対立関係にあったヘルレ公に仕えたのだという。その後ヘルレ公アドルフの娘フィリップ・ファン・エグモントが1485年にロートリンゲン公レナート2世と結婚した。スヘルテマはこの結婚によって生まれた二人の息子を教育するために、ヒンレク・ファン・アルクメルが『ライナルト物語』を改編したのだとする⁹⁹⁾。しかしそれ以上に説得力があるのは、ロートリンゲン公みずからが妻のためにオランダ語を学ぼうとしたと考える説である¹⁰⁰⁾。また、ロートリンゲン公が結婚したのが1485年で、その求めに応じて『ライナー

ルト物語』を改編して原本をレーウに渡して印刷が仕上がったのが1487年～1490年頃とするのも時期的に符合する¹⁰¹⁾。

このヒンレク・ファン・アルクメルには前述した、非常に限られた範囲でしか知られなかった『狐ライナルドゥス』の写本か印刷本を読んでいた形跡がある。「ケンブリッジ断片」の直接の後継となる『狐ラインケ』の教訓に、『狐ライナルドゥス』の一節から引用したものがあからである¹⁰²⁾。とすれば、R・B・C・ハイヘンスが指摘するように、『狐ライナルドゥス』が成立した13世紀の第4四半期から、その印刷本が1859年にキャンベルによって発見されるまで、ヒンレク・ファン・アルクメルとユトレヒトの印刷業者以外に、この作品を知る者は誰もいなかったことになる¹⁰³⁾。写本あるいは印刷本がそれだけ限定された範囲でしか移動しなかったのである。

以上、写本の『ライナルト物語』やゴードのヘラルト・レーウが刊行した『狐ライナルト物語』さらに「ケンブリッジ断片」などが、やはりユトレヒトとその地の印刷業者、またカルトウジオ会とに密接に関連していることを示した。写本の調達や印刷用原本の製作とその後の印刷と刊行という一連の作業が、ユトレヒトを中心に分業体制が敷かれて行われている。印刷業者が同じように活動していたスヴォレやアールストといった他の都市では状況が異なるかもしれない。ただ、少なくともユトレヒトとゴード、ハーレムは書籍出版に関して密接な関係にあったにちがいない¹⁰⁴⁾。これはすでにクライトヴァーヘンが1950年に指摘していた問題である。しかし当時は問題が提起されただけで、具体的な論考までには到らなかった¹⁰⁵⁾。原活版印刷術の時代からこうした初期の印刷術の時代まで、どのような変遷が一都市のなかで、また都市相互間にあったのかを解明することが今後の課題となるであろう。

5. 結語

以上、オランダの原活版印刷術とその書籍について、様々な観点から考察した。本論中ですでに明らかになったように、いわゆる印刷術の最初の発明者であると一部で主張されてきたハーレムのコスターは、原活版印刷術によって製作された多種多様な書籍とはなんの関係もない。コスターの名前がこうした原活版印刷本との関わりで現実に登場したことは一度もない。研究史を遡れば遡るほど、ゲーテンベルク・コスター論争に巻き込まれてしまい収拾が着かなくなる。それゆえ、インキュナブラの研究史を論じる場合を除いて、ゲーテンベルク・コスター論争とはいまや距離を置くことが大切であろう¹⁰⁶⁾。

オランダの原活版印刷本はマインツの印刷本と比べてしばしば幼稚だと形容されてきた。オランダ初期の「幼稚な活字書体」あるいは「幼稚なオランダ印刷本」、「幼稚な印刷所」といった具合である¹⁰⁷⁾。そうした言辭は、もともとオランダの印刷本がより古いもので、マインツのものは新しいとする誤謬から出たものと思われるが、それに関しては印刷本を判断する際の基準を指摘しておきたい。ヘリングによれば、3つの技術的基準があり、それらは(1)行末が揃っていること、(2)版組ができていること、(3)裏面の行の位置が表面のそれと整合していること、すなわち校正用語で言うところの「見当が合っていること to make register」の3つである¹⁰⁸⁾。これらの基準に従うと、ドナトゥスやその他の教科書は完璧に製作されているので、決してプリミティブとは呼べないという¹⁰⁹⁾。またゴシック体というフォントは、16世紀にローマン体が採用される以前の通常のフォント

であって、幼稚でプリミティブな書体と言うのは的外れである。前述したタイプ8のように、印刷された字体が美しくないのは、たんに使い古されて摩耗したフォントを使用したからにすぎない。教科書以外に残された活版印刷本の高度な内容からしても、幼稚とかプリミティブとか形容するのは誤りであって、間違ったイメージを植えつける恐れがある。

オランダの原活版印刷術に関してユトレヒトに研究の焦点を合わせるべきこと、さらにゴータやハーレムなどの周辺都市とユトレヒトの出版業との関係を考察することが、新たな課題として登場した。数世紀いらい研究者を呪縛し続けたコスターから解放されて、ようやくインキュナブラ研究の新しい視野が開けたのである¹¹⁰⁾。

注

- 1) アールスト (Aalst) はベルギーのブリュッセルとヘント間にある都市である。
- 2) 『狐の叙事詩』462-463. また Cuijpers 1998:27-28.
- 3) BMC:xvi. BMC は Catalogue of Books Printed in the XVth Century Now in the British Museum. Lithographic Reprint. Part IX Holland · Belgium. London 1967 の略である。以下この略号を用いる。
- 4) 庄司 1957/1973:101.
- 5) 庄司 1957/1973:102-103.
- 6) 以上の三つの手掛かりに関しては Gaselee 1938:22 を参照した。
- 7) Tronnier 1926:175-176. また van der Linde 1878:270 参照。木版本によるドナトゥスについては Haebler 1928 を参照されたい。
- 8) 『バタヴィア』を読むと、片面印刷で裏面を貼り合わせてあるとの記述があるので、ユニウスが当時存在した『人間救済の鑑』のオランダ語版を実見しているのがわかる。ただそのラテン語による書名は *speculum nostrae salutis* と間違った書名で、本来は *speculum humanae salvationis* である。この事実から、ユニウスは『人間救済の鑑』のラテン語版は見たことがなかったとされる (Robbe 2010a:216 および 216 注 704)。
- 9) 「虚構による神話」の詳細に関しては Robbe 2010b、とくに p.22 参照。
- 10) 原活版印刷本の定義に関しては HPT I :4 参照。また「原活版印刷本」あるいは「原活版印刷術」という訳語は本論の著者によるもので、いまだ定訳はない。
- 11) HPT はつぎの文献の略号であり、本論でもこれを用いる。Witze en Lotte Hellinga, *The Fifteenth-Century Printing Types of The Low Countries*. 2 Vols. Amsterdam 1966. 8種類とは、フォントタイプ2および3を繋ぐ中継肢と考えられているタイプ2*=98 (103?) G およびタイプ2**=111 (113?) G を除いた8種類をいう (HPT I :5, II :457-458)。
- 12) Wilson & Wilson 1984:116. 引用箇所に base とあるのを校正用語で言う「並び線 base line」だとした。最下行の並び線から上へ第21行目の並び線までを計測するという記述もある (Machiels 1973:41)。
- 13) 原活版印刷本に使用されたフォントタイプの種類と作品の内容から4つのグループに分類する考えもある。その場合はラウレンティウス・ヴァラ訳の『イソップ物語』がもう一つ独立したグループを形成する (Hellinga 1996:60)。
- 14) 中世オランダ語で最大の合冊された写本はフルテム写本とコンブルク写本だとされ、それぞれ1399年～1410年、1380年～1425年に成立したとされる。フルテム写本では214のテキストが、コンブルク写本にはそれが82あるという (Hogenelst 1994:259-260)。そう考えると、ここであげた印刷された合本もこうした写本時代の本の製作法を踏襲したものと言えよう。
- 15) BMC:4-5.
- 16) 記述に当たっては次の文献を参照した。記述にとくに関係する文献は特別に明記した。Holtrop 1868:15-37, Hessels 1887:25-36, HPT I :4-9, II :457-459, BMC IX :xxii-xxvi, 1-6, Kruitwagen 1949-51b:257-270, 321-337.
- 17) 英語の *unmixed* を「純正」と訳したものの、そこには「本物の」あるいは「紛い物でない」という含

- 意はなく、たんに「まじりけのない」という意味で使った。他方 *mixed* には「混成」という訳語を当てた。
- 18) キャンベルのインキュナブラ総覧にある番号によって個々のインキュナブラを指示するのが通例であるので、本論でもそれにしたがった。CA は Campbell 1874: M.-F.-A.-G. Campbell, *Annales de la typographie néerlandaise au XV^e siècle*. La Haye 1874 の略である。
 - 19) Robbe 2010a:234-237. また Wilson & Wilson 1984:120 参照。
 - 20) Roobe 2010a:235-237. 標本数に関してはこの文献を参照した。
 - 21) BMC 2.
 - 22) HPT II :458.
 - 23) Wilson & Wilson 1984:126.
 - 24) Wilson & Wilson 1984:116.
 - 25) たとえば Ottley 1863:268-302. 参照
 - 26) Stevenson 1968: 95.
 - 27) Daniels 1949:X. また『キリスト教大事典』1094「よけいろんてきかいしゃく」参照。
 - 28) Daniels 1949:95-102. また Robbe 2010a:320-323.
 - 29) 一つの版だけが残るものの (CA98)、この版の 25 の部分が残っている (HPT II :458)。
 - 30) おそらく 3 世紀に成立したラテン語による格言また人生訓を内容とする対句集で、作者は一部では大カトーとされるものの、それに反対する意見もあり、定かではない。中世においてラテン語教材として広く流布した (Lexikon 1999:3:sp.1123 参照)。
 - 31) CA1174, CA1459 参照。
 - 32) HPT I :4-5 による。また HPT II :457-458 参照。
 - 33) HPT I :5.
 - 34) HPT I :5. この断片は MKC I 633^a と表記される。MKC I とは、Kronenberg 1964 に記載されたインキュナブラを指す。
 - 35) HPT I :5. この断片は CA<633^b> と表記される。括弧付きの数字は、それが Lotte & Witze Hellinga 1965 に掲載されているインキュナブラであることを示す。
 - 36) HPT I :5.
 - 37) BMC p.4 また Kruitwagen 1949-51b:325-326 参照。それぞれの人物については Brockhaus 1796/1996 の当該項目を参照した。
 - 38) Verjaring 1973:75.
 - 39) HPT I :5.
 - 40) HPT II :458 また CA <1022^a>, Husung 1933:36-42, Hellinga 1996:59-69 参照。
 - 41) HPT II :458 また KC I :1437^a, Zedler 1921:55 によれば、これはポルピュリオスの *Liber quinque praedicabilium* であるという。KC I とは、それが Kronenberg 1956 に記載のあるインキュナブラであることを示す。
 - 42) HPT II :458 を参照されたい。
 - 43) Zedler 1742/1996:Bd.3:sp.898-899 による。
 - 44) 本来は六歩格 1070 行から成る『イーリアス』のラテン語抄訳をさらに 430 行に抜粋したもの。12 世紀から 13 世紀にかけて甚だしい誤解によって前 5 世紀のテーバイのピンドロス (Pindarus Thebanus) に帰されたというものの、詩行中にある折り句は *Italicus* を示している (Paulys 1914, Bd.17:sp.1059)。この *Italicus* は一部では *Silius Italicus* (1 世紀) とされるものの (Kruitwagen 1949-51b:329, BMC:5)、他方では *Baebius Italicus* (1 世紀) だと見なされ (Paulys 1914, 17:sp.1057, KB:Ilias epitome)、作者だと想定されている。
 - 45) Kruitwagen 1949-51b:326, 329.
 - 46) Verjaring 1973:75.
 - 47) Brockhaus 1796/1996 Bd.22:197 による。
 - 48) HPT I :6. また BMC:xxi.

- 49) Zedler 1921:124-126.
- 50) Schwenke 1905:535. 論じられたデュッセルドルフにあるドナトゥス断片は KC I 633⁶⁹ である。GW8812 としても知られる。GW はインキュナブラ総覧の *Gesamtkatalog* の略である。また HPT I :8 参照。
- 51) Schwenke 1905:534-535.
- 52) Zedler 1921:118.
- 53) HPT I :9. 断片は CA637。
- 54) Zedler 1921:118.
- 55) Holtrop 1868:16-17 および *Kruitwagen* 1949-51b:323-324 参照。
- 56) HPT I :9. Hessels 1887:32 によれば 16 折判、しかしキャンベル (CA1) によれば 8 折判だという。
- 57) Bradshaw 1889:268.
- 58) これに関する議論は Hellinga-Querido 1970:13 を参照した。かつては活字鋳造工と印刷業者は同一人物だと考えられていた。
- 59) Hellinga-Querido 1967:389.
- 60) 論争の詳細は *Kruitwagen* 1948 を参照されたい。
- 61) たとえば Holtrop 1868、Campbell 1874 などの総覧がある。
- 62) Holtrop 1868: X.
- 63) 初出は *Memorandum of the Cambridge Antiquarian Society, No. 3, June 1871. pp.5.* さらに *Collected Papers of Henry Bradshaw, Cambridge 1889, p.258-280* に再録。
- 64) ヨハン・フェルデナーはもともとルーヴァンで活動した印刷業者 (1473 年～1477 年) で、ユトレヒト (1478 年～1481 年) で印刷業を続けた後、クーレムボルクに移住した後に再びルーヴァンに戻った (*Verjaring* 1973:143-146)。フェルデナーは 1481 年刊の『使徒書簡集と福音書 *epistelen en evangelien*』において 29 の木版画を二分割して 58 とし、そのうちの 2 つをこれに用いた (*Kruitwagen* 1949-1950a:162)。この 2 つは W・M・コンウェイ Conway の番号によると 57a および 58a で、その記述は CA690 にあるという (*Kruitwagen* 1949-1950a:162)。57a は最後の審判、58a は 10 人の乙女 (「マタイによる福音書」25 章) を描いたもの (Conway 1884/1970:205)。さらにフェルデナーは、1483 年に『人間救済の鑑』のオランダ語版を刊行しており、そこで全 29 の木版画を二分割して 58 の木版画をすべて再利用した (CA1573)。*Kruitwagen* 1949-1950a:145-146 を参照されたい。
- 65) Bradshaw 1889:261. “leave” の解釈を巡ってその後議論が続いたので、そのまま原語をあげておいた。詳細については *Kruitwagen* 1949-51a:150-151、Evers:1950:68-72、Lotte & Wytze Hellinga 1972:239 を参照されたい。
- 66) たとえば CA1186 (ポンタヌス・デ・ローマ)、CAⅢ:615a (フランス語版ドナトゥス) に関して。指摘は *Kruitwagen* 1949-1951a:150 註 7 による。また Campbell 1874:Ⅷ を参照されたい。
- 67) Daniels 1949:XLIX、LVIII-LIX. ツィーリヒゼーは現在のツィリクスゼーのこと。
- 68) Robbe 2007:51. J・ロッベ Robbe はユトレヒトあるいは少なくともユトレヒト司教区で成立したと考えているが、ここでは単にユトレヒト成立としても構わないだろう。
- 69) キャンベル自身がこの見返しにあるテキストとポンタヌスの法律書のオランダ王立図書館にある完本と比較したところ、一致する文がなかったという。したがってキャンベルの推測では、ポンタヌスの本でこれまで知られていないものの一節ではないかという (Campbell 1878/82:199-200)。
- 70) Husung 1933:41-42、Hellinga 1996:59-69.
- 71) Hellinga 1996:59-69、とくに 60-61.
- 72) *Kruitwagen* 1925:353-370 参照。また *Kruitwagen* 1949-51b:321-337. とくに 328-335. ラウレンティウス・ヴァアラ以下の墓碑名および警句は、メールマノ・ウェストレニウム博物館およびダルムシュタットに所蔵されている長編のサリチェト合本にあり、ブリュッセルの合本にはない (*Kruitwagen* 1949-51b:329)。
- 73) Lotte & Witze Hellinga 1970:188.
- 74) Lotte & Witze Hellinga 1970:187-189. また *Verjaring* 1973:92.
- 75) *Kruitwagen* 1949-51b:257-259.
- 76) Lotte & Witze Hellinga 1970:188.

- 77) Robbe 2007:51-56、Robbe 2010a:246-251.
- 78) Kruitwagen 1949-51b:261-268.
- 79) Hellinga 1996:63.
- 80) Haebler 1954:254.
- 81) Haebler 1954:254. 指摘は BMC:xxi による。
- 82) Kruitwagen 1925:366-367.
- 83) de Keyser 1938:11-12. 唯一完本として残る『ライナルト物語』のブリュッセル写本に用いられた書体からそう判断されており、これは研究者の間で認められている。
- 84) 『狐の叙事詩』:454-457.
- 85) Berteloot 1987:398.
- 86) Wackers 2002:331. また Schlusemann/Wackers 2005:421.
- 87) ダヴィド・ファン・ブルゴーニュに関する記述は Nijhoffs Geschiedenis-lexicon 1981:145 によった。
- 88) 『狐ライナルドゥス』の詳細は Huygens 1968:7-35 参照。とくに 21-28.
- 89) Huygens 1968:25-26.
- 90) Huygens 1968:26. 他方、バルドゥイヌスがラテン語に訳して仕上げた『狐ライナルドゥス』は聖堂参事会学校用で、青少年のラテン語教育と道徳教育のため、また聖職者向けの重要事項を教えるためであったとする意見もある (Wytze & Lotte Hellinga 1965:62)。
- 91) Wytze & Lotte Hellinga 1965:62.
- 92) 『狐ライナルドゥス』の詳細は Huygens 1968:7-35 参照。レーウと、ケーテラールとレームプトが印刷した作品ではさらに『アレキサンダー大王伝』および『チェスの遊び』が共通しており、また『ゲスタ・ロマノールム』がある。レーウは当初ラテン語の活字を持っておらず、『チェスの遊び』のオランダ語訳を出版した。
- 93) 『狐の叙事詩』: 484、501 参照。
- 94) 『狐ラインケ』: 3-4.
- 95) Wytze & Lotte Hellinga 1965:61. ライナルトに関する各写本、印刷本、印刷用原本の関係を詳細に論じている。
- 96) Scheltema 1826:XXIX.
- 97) Zilverberg 1951:56. Zilverberg の用語を見ると *procureur-generaal* であるので「検事総長」と訳した。
- 98) Scheltema 1826:XXIX-XXX.
- 99) Scheltema 1826:XXX-XXXI.
- 100) Prien 1882:2-5.
- 101) Prien 1882:4. F・プリーン Prien はブラッドショーの意見を取り入れて刊行年を 1487 年とし、また 1485 年以前にヒンレク・ファン・アルクメルが原稿を仕上げている、ロートリンゲン公の依頼を受けてはじめて印刷に回した可能性に言及している (Prien 1882:4)。
- 102) Huygens 1968:27-28.
- 103) Huygens 1968:28. キャンベルは『狐ライナルドゥス』をデヴェンターで発見して、これを刊行させている (M. F. A. G. Campbell, *Reynardus Vulpes. Poëma ante annum 1280 a quodam Baldwino e lingua teutonica translatum. Den Haag 1859*)。
- 104) ハーレムが対象になるのはコスター伝説絡みではない。そうではなく、かつてゴータのヘラールト・レーウ印刷所で働いていたヤコブ・ベラールト Jacob Bellaert がハーレムに移住してハーレム最初の印刷業者になったからである。
- 105) Kruitwagen 1949-51a:157 注 22.
- 106) グーテンベルク支持派とコスター支持派の両派に関して、庄司 1957/1973:99-100 にそれぞれ研究者の名前があがっている。
- 107) 庄司 1957/1973:105.
- 108) Hellinga-Querido 1970:16. また Hellinga 1972:189.
- 109) Hellinga-Querido 1970:16. また Hellinga 1972:189.

110) 本研究は JSPS 科研費の助成を受けたものである（基盤研究 C 課題番号 JP16K02578）。

参考文献

- Berteloot 1987: Amand Berteloot, "WAAROM ZOU DEN WIJ AAN WESTVLAANDEREN DENKEN, WANEER WIJ ALLES ZO GOED IN HOLLAND KUNNEN PLAATSEN?" RIJMONDERZOEK IN *REYNAERTS HISTORIE*. in: *Miscellanea Neerlandica* II, 389-399.
- BMC: *Catalogue of Books Printed in the XVth Century Now in the British Museum. Lithographic Reprint. Part IX Holland · Belgium*. London 1967
- Bradshaw 1889: *Collected Papers of Henry Bradshaw*. Cambridge 1889
- Brockhaus 1796/1996: *Brockhaus Die Enzyklopädie*. Zwanzigste, überarbeitete und aktualisierte Auflage. 22. Bd. Leipzig/Mannheim 1796/1996
- M.-F.-A.-G. Campbell, *Reynardus Vulpes. Poëma ante annum 1280 a quodam Balduino e lingua teutonica translatum*. Den Haag 1859
- Campbell 1874: M.-F.-A.-G. Campbell, *Annales de la typographie néerlandaise au XV^e siècle*. La Haye 1874
- Campbell 1878/82: M.-F.-A.-G. Campbell, De oudst bekende Nederlandsche Boekdrukkerij. in: *Bibliographische Adversaria* 4 (1878/82) p.197-200.
- Conway 1884/1970: W.M. Conway, *The woodcutters of the Netherlands in the fifteenth century*. Cambridge 1884 (herdr. Hildesheim en Nieuwkoop 1970)
- Cuijpers 1998: Peter M. H. Cuijpers, *Teksten als koopwaar: vroege drukkers verkennen de markt. Een kwantitatieve analyse van de productie van Nederlandstalige boeken (tot circa 1550) en de 'lezershulp' in de seculiere prozateksten*. Bibliotheca Bibliographica Neerlandica XXXV. Nieuwkoop 1998
- Daniels 1949: L. M. Fr. Daniels O. P.: *De spiegel der menschelijker Behoudenesse. De Middelnederlandse vertaling van het Speculum humanae salvationis naar het Handschrift uitgegeven, ingeleid en toegelicht door DR L. M. Fr. Daniels O. P.* Studiën en tekstuitgaven van ons geestelijk erf Deel IX, Tielt 1949
- Dietse studies. Bundel aangebied aan Prof. Dr. J. Du Plessis Scholtz*. E. Lindenberg, E. Raidt & J.A. Verhage (ed.), Assen – Kaapstad – Pretoria. 1965
- Essays in Honour of Victor Scholderer*. Dennis E. Rhodes (ed.), Mainz 1979
- Evers 1950: G.A. Evers, EEN INCUNABEL ERGENS „LATEN“. in: *Oud-Utrecht* 23 (1950) No. 9/10 68-72.
- Gaselee 1938: Stephen Gaselee, *The "Costerian" Doctrinale of ALEXANDER DE VILLA DEI*. Reproduced in Collotype Facsimile with Introduction by Stephen Gaselee. Cambridge 1938
- Der Gegenwärtige Stand der Gutenberg-Forschung*. hrsg. von Hans Widman. Bibliothek des Buchwesens Band 1. Stuttgart 1972
- Gutenberg Festschrift 1925: *Gutenberg Festschrift zur Feier des 25 jährigen Bestehens des Gutenbergmuseums in Mainz*. hrsg. von A. Ruppel, Mainz 1925
- GW: Gesamtkatalog der Wiegendrucke. <http://www.gesamtkatalogderwiegendrucke.de>
- Haebler 1928: Konrad Haebler, Xylographische Donate. in: *Gutenberg-Jahrbuch* 1928 15-31.
- Haebler 1954: Konrad Haebler, Zum Studium der altniederländischen Donate. in: *Zentralblatt für Bibliothekswesen* 35 (1954) 242-254.
- Hellinga 1972: Lotte Hellinga, Further fragments of Dutch prototypography. A list of findings since 1938. in: *Quaerendo* 2 (1972) 182-199.
- Hellinga 1996: Lotte Hellinga, Max Husung and his discovery of a fragment of Dutch early printing. in: *Bibliothek und Wissenschaft* 29 (1966) 59-69.
- Hellinga-Querido 1967: Lotte Hellinga-Querido, Het onderzoek van de Nederlandse prototypografie. in: *Bibliotheekleven* 52 (1967) 11 (November) 387-389.
- Hellinga-Querido 1970: Lotte Hellinga-Querido, De oudste Nederlandse drukken. in: *Spiegel historiael*.

- Maandblad voor geschiedenis en archeologie*. 5 (1970) 11-17.
- Hessels 1887: *Haarlem The Birth-Place of Printing, not Mentz*. London 1887.
<http://www.archive.org/details/cu31924029495128>
- Hogewelst 1994: Dini Hogewelst, Zoekplaatje: 'Comburg' versus 'Hulthem' in: J. Reynaert e.a. *Wat is wijsheid? Lekenethiek in de Middelnederlandse letterkunde*. Amsterdam 1994, 259-273, 429-433.
- Holtrop 1868: J.-W. Holtrop, *Monuments Typographiques des Pays-Bas au Quinzième Siècle*. La Haye 1868 <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k54782588.r>
- HPT: Witze en Lotte Hellinga, *The Fifteenth-Century Printing Types of The Low Countries*. 2 vols. Amsterdam 1966.
- Husung 1933: Max Joseph Husung, Ein unbekanntes Blatt vom holländischen Frühdrucker. in: *Gutenberg-Jahrbuch* 1933. 36-46.
- Huygens 1968: DR. R.B.C. Huygens, *Reynardus Vulpes. De Latijnse Reinaert-Vertaling van Balduinus Iuvenis*. Zwolle 1968
- KB: Ilias epitome: Koninklijke Bibliotheek, Ilias epitome. <https://www.kb.nl/themas/boekgeschiedenis/meer-bijzondere-boeken/ilias-epitome>
- de Keyser 1938: Paul de Keyser, *Reinaerts Historie. (Hs. Koninklijke Bibliotheek 14601)*. Rijksuniversiteit te Gent, Werken uitgegeven door de faculteit van de Wijsbegeerte en Letteten, Extra serie: Facsimiles I. Antwerpen 1938
- 『狐の叙事詩』: 『狐の叙事詩「ライナールト物語」「狐ライナールト物語」』 檜枝陽一郎編訳・読解 2012年 言叢社
- 『狐ラインケ』 藤代幸一訳 一九八五年 東京 法政大学出版局
- 『キリスト教大事典』 改訂新版 教文館 東京 1963年
- Kronenberg 1956: M.E. Kronenberg, *Campbell's Annales de la typographie néerlandaise au XV^e siècle. Contribution to a new edition*. Chapter I: Additions (KC I), The Hague 1956
- Kronenberg 1964: M.E. Kronenberg, More Contributions and Notes to a New Campbell Edition. in: *Het Boek* 36 (1964) 129-139.
- Kruitwagen 1925: Fr. B. Kruitwagen, Die Ansprüche Hollands auf die Erfindung der Buchdruckkunst. in: *Gutenberg Festschrift* 1925. 353-370.
- Kruitwagen 1948: Fr. B. Kruitwagen, Laurens Janszoon Coster weer op het tapijt. in: *Het Boek* 29 (1948) 69-116.
- Kruitwagen 1949-51a: Fr. B. Kruitwagen, Kunnen de Costeriana te Utrecht, en de blokboeken te Zwolle gedrukt zijn? in: *Het Boek, tweede reeks van het tijdschrift voor boek- en bibliotheekwezen* 30 (1950) (1949-1951) 145-167.
- Kruitwagen 1949-51b: Fr. B. Kruitwagen, Bestaat er een verband tussen de pseudo-Costeriana drukkerij en het Utrechtse universiteitsplan van 1470? in: *Het Boek, tweede reeks van het tijdschrift voor boek- en bibliotheekwezen* 30 (1949-1951) 257-270, 321-337.
- Lexikon 1999: *Lexikon des Mittelalters. Studienausgabe*. 3. Band Stuttgart/Weimar 1999
- van der Linde 1878: A. van der Linde, *Gutenberg. Geschichte und Erdichtung aus den Quellen nachgewiesen von dr. A. v. d. Linde*. Stuttgart 1878
- Lotte & Wytze Hellinga 1965: Lotte & Wytze Hellinga, Additions and Notes to Campbell's Annales and GW (Supplement X to Campbell). in: *Beiträge zur Inkunabelkunde, 3. Folge*. 1 (1965) 76-86.
- Lotte & Witze Hellinga 1970: Lotte and Wytze Hellinga, Wilhelmus Hees, Printer or Bibliophile? in: Dennis E. Rhodes (ed.), *Essays in Honour of Victor Scholderer*, Mainz 1979, 182-195.
- Lotte & Wytze Hellinga 1972: Lotte and Wytze Hellinga, Die Coster-Frage, in: *Der Gegenwärtige Stand der Gutenberg-Forschung*. hrsg. von Hans Widman. Stuttgart 1972
- Machiels 1973: Machiels, Jerome, Onbekend Doctrinale-fragment in het speculumtype. in: *De brug* 17 (1973, nr.1) *Mededeling Centrale Bibliotheek van de Rijksuniversiteit te Gent*.

- Miscellanea Neerlandica II: Miscellanea Neerlandica II. Opstellen voor Dr. Jan Deschamps ter Gelegenheid van zijn zeventigste verjaardag.* Onder redactie van Elly Cockx-Indestege en Frans Hendrickx. Leuven 1987
- Nijhoffs Geschiedenis-lexicon 1981: *Nijhoffs Geschiedenis-lexicon*. samengesteld door H. W. J. Volmuller in samenwerking met de redactie van De Grote Oosthoek, Martinus Nijhoff, 's-Gravenhage/Antwerpen 1981
- Ottley 1863: W.Y. Ottley, *An Inquiry concerning the Invention of Printing*. London 1863
<https://archive.org/details/inquiryconcernin00ottl>
- Pauly 1914: *Pauly's Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft. Neue Bearbeitung begonnen von Georg Wissowa*. Stuttgart 1914
- Prien 1882: Friedrich Prien, Zur Vorgeschichte des Reineke Vos. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* (PBB) 8/3 (1882) 1-53.
- Robbe 2007: Joost Robbe, David van Bourdondië en het *Speculum humanae salvationis*. Een nieuw perspectief op de invoering van de boekdrukkunst in de Noordelijke Nederlanden. in: *Millenium, tijdschrift voor middeleeuwse studies*. 21 (2007) nummer 1, 39-57.
- Robbe 2010a: Joost Roger Robbe, *Der mittelniederländische Spieghel onser behoudenis und seine lateinische Quelle. Text, Kontext und Funktion*. Niederlande-Studien Bd.48. Münster / New York / München / Berlin 2010
- Robbe 2010b: Joost Roger Robbe, De literaire aspecten van de Costerlegende: Mythologie in de vorm van een klassieke pleitrede. in: *Internationale Neerlandistiek* 48 (2010) 3, 17-29.
- Scheltema 1826: Jacobus Scheltema, *Reintje de Vos van Hendrik van Alkmaar, naar den Lubekschen Druk van 1498*. Vertaald en uitgegeven door M^r. Jacobus Scheltema. Haarlem 1826.
- Schlusemann/Wackers 2005: *Reynaerts historie*. Herausgegeben und übersetzt von Rita Schlusemann und Paul Wackers. Münster 2005
- Schwenke 1905: Paul Schwenke, Neue Donatfunde. in: *Zentralblatt für Bibliothekswesen* 22 (1905) 529-535.
- 庄司 1957/1973: 庄司浅水『印刷文化史』昭和32年第1刷 昭和48年増補第2刷 東京 印刷学会出版部
- Stevenson 1968: C.M. Briquet, *Les Filigranes*, edited by Allan H. Stevenson, Amsterdam 1968
- Tronnier 1926: Adolph Tronnier, Ein „Costerfund“ in Mainz. in: *Gutenberg-Jahrbuch* 1926 144-180.
- Verjaring 1973: *De vijfhonderste verjaring van de boekdrukkunst in de Nederlanden. Tentoonstelling in de Koninklijke Bibliotheek Albert I*. Catalogus Brussel 1973.
- Wackers 2002: Paul Wackers, *Reynaert in Tweevoud Deel II Reynaerts Historie*. Amsterdam 2002
- Wat is wijsheid? Lekenethiek in de Middelnederlandse letterkunde*. J. Reynaert e.a. (ed.) Amsterdam 1994
- Wilson & Wilson 1984: Adrian Wilson & Joyce Lancaster Wilson, *A Medieval Mirror Speculum humanae salvationis 1324-1500*. The University of California Press, Berkeley Los Angeles London 1984
- Wytze & Lotte Hellinga 1965: Wytze en Lotte Hellinga, De betekenis van de incunabelkunde voor de neerlandistiek. in: E. Lindenberg, E. Raidt & J.A. Verhage (ed.), *Dietse studies. Bundel aangeboden aan Prof. Dr. J. Du Plessis Scholtz*. Assen – Kaapstad – Pretoria. 1965 52-76.
- Zedler 1742/1996: Johann Heinrich Zedler, *Grosses Vollständiges Universal-Lexikon*. Leipzig und Halle 1742, 2. Vollständiger photomechanischer Nachdruck durch die Akademische Druck- u. Verlagsgesellschaft, Graz 1996.
- Zedler 1921: Gottfried Zedler, *Von Coster zu Gutenberg*. Leipzig 1921
- Zilverberg 1951: S.B.J. Zilverberg, *DAVID VAN BOURGONDIE, BISSCHOP VAN TERWAAN EN VAN UTRECHT (± 1427-1496)*. Groningen, Djakarta 1951

(本学文学部教授)